

さいごうなんしゅういくん

## 『西郷南洲遺訓』

### 第二十一条

道は天地自然の道なるゆゑ、

意訳：道「\\人として正しい生き方」とは、天地自然の法則なのだから、

講學の道は敬天愛人を目的とし、

（私たちの）勉強「\\学問」は「天を敬い、人を愛する心」「\\敬天愛人」を学ぶことを目的とし、

身を修するに

自分自身の人格を磨く「\\身を修める」にあたっては、

克己を以て

「自分自身（の甘え・弱さ）に打ち勝つこと」「\\克己」を

終始せよ。

始めから終わりまで徹底しなさい。

己おのに克かつつの極功きこくは

己に克つことの究極の到着点は、

「母意母必母固母我」と云へり。

（『論語』にあるように）「（主観的な）思い込みをしない、無理押しをしない、物事に固執しない、自己中心的に動かない」ことだ。

總じて人は己れに克つを以て成り、

およそ人間というものは、自分自身(の甘え・弱さ)に打ち勝つこと「克己」によつて、成功し「物事を成し遂げ」、

自ら愛するを以て敗るゝぞ。

自分を愛しすぎる「甘やかす」ことによつて、失敗するものだ。

能く古今の人物を見よ。

古今の(歴史上の)人物をよく見てみなさい。

事業を創起する人、其の事大抵十に七八迄は能く成し得れ共、  
事業を立ち上げる人は、その事の大抵全体の7割から8割までは成し遂げることが  
できるけれども、

残り二つを終り迄成し得る人の希れなるは、

(しかし、)残りの2割を最後まで成し遂げられる人が減多にいないのは

始は能く己れを慎み事をも敬する故、

最初のうちはよく自分を慎んで「謙虚に」物事を厳かに「敬つて慎重に」取り組む  
ため、

功も立ち名も顯るゝなり。

功績も出て、名前も世間に知れ渡るのである。

功立ち名顯るるに隨い、いつしか自ら愛する心起り、

(ところが、)成功して有名になるにつれて、いつの間にか自分を甘やかす心が生じ、

きょうくかいしん いゆる  
恐懼戒慎の意弛み、

(初心を忘れ、他者や物事に対して)恐れ慎む「謙虚な」気持ちが緩み、

きょうきょう きょうや ちょう  
驕矜の氣漸く長じ、

傲慢な気持ちが次第に増長し、

その成し得たる事業を負み、  
たの

その成し得た(過去の)事を自負し(過ぎて自惚れ)、  
うぬぼ

いやく  
苟も我が事を仕遂げんとて、

なんとかして、自分の事業を成し遂げようとして、

まずき仕事に陥り、終に敗るるものにして、  
おちい つい

(その結果、)拙いやり方に陥り、最後には失敗するもので、

みなみずか まね  
皆自ら招くなり。

すべては自分(の傲慢さ)が招いた(結果)である。

ゆえ  
故に己に克ちて、

それゆえ、(常に)自分自身(の甘え・弱さ)に打ち勝ち、

み  
睹ず聞かざる所に戒慎するものなり。  
かいしん

(誰も)見ていない、(誰も)聞いていない場所「心の奥底」で(あっても)、  
自らを戒め慎むべきなのである。

## 第二十四条

道は天地自然の物にして、

意識：道〔人として正しい生き方〕というのは（人間が勝手に作ったルールではなく、）天地自然に由来するものであり、

人は之を行ふものなれば、

人間はこれ〔この道〕を実践すべき存在であるから、

天を敬するを目的とす。

天〔天地自然の道理・人智を超えた偉大な存在〕を敬うことを（生きる上での）目的としなければならない。

天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、

天は、他の人も自分も（命あるものをすべて）平等に愛してくださいから、

我を愛する心を以て人を愛する也。

自分を愛する心をもって、人を愛するのである。

自分を大切にすることと同じ温かい心で、他人のことも大切にしなければならない。